



(豊田)

発掘調査は、史跡公園整

のところに位置する。

間古戦場跡は、西南西4km

ことでも著名である。桶狭

たという伝承が残されている

夜に、今川義元が宿営した

(二五六〇)の桶狭間の戦前

また、本城跡は、永禄三年

前後で、平城と考えられる。

から南東にのびる低丘陵の先端に立地する城跡である。標高は二二m

本遺跡は、名古屋市南東部から隣接する豊明市にかけて、北西か

- 1 所在地 愛知県豊明市沓掛町字東本郷
- 2 調査期間 一九八一年(昭56) 二月〜一九八四年二月
- 3 発掘機関 豊明市沓掛城址発掘調査団
- 4 調査担当者 伊藤秋男・松原隆治・木村光一
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 一五世紀末〜一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

愛知・沓掛城跡

備の事前調査として、主に本丸跡を中心に行った。調査の結果、大

きく三期に分かれる遺構群を検出した。木簡は、そのうちで最も下

層の生活面から検出された汚水だまりと考えられる池(SG〇一)か

ら、すべて出土した。この池からは、ほかに多量の木製品(桶・鍋蓋

・箸・膳・漆器など、当時の日常什器と考えられるもの)・土器・陶磁器

・食物残滓などが共伴している。

8 木簡の积文・内容

(1) ・「

の

「

「と」

(2) 「

(3) 「

(4) 「

「 (花押)」

「 (花押) 十七」

「 (花押) 十七」

「 (花押)」

108×(105)×4

50×(15)×2.5

51×26×4.5

(5) ・「天文

(穿孔)

十七」

・「(穿孔) (花押)」

本城跡出土の墨書の認められる木簡は、ほかに二八点、計三三三点にのぼる。ほかの二八点は、昨年の本誌上において、その概要は発表済であり、今回の五点は、遺物再整理の段階で新たに発見されたものと、諸般の事情で、前回発表できなかったものである。

(1)については、文字として認められる部分もあるが、文字の方向も一定せず、一貫した意味をなさない。落書の類と考えられる。(2)についても、墨痕はあるが文字ではないとも考えられる。(3)~(5)は、前回発表した(7)・(8)、『木簡研究』七号)と同様の形態・墨書をもつもので天文一七年(一五四八)を表わすと考えられる。

なお、(4)・(5)の木簡の法量が未記入であるのは、実測前に、保存処理に出してしまった当方の不手際の結果であり、もし機会があれば、後日何らかの形で発表したい。

また、昨年の本誌上では触れなかったが、木簡の积文・解読については、愛知教育大学教授新行紀一氏に、そのための赤外線テレビ撮影については、浜松市立博物館の向坂鋼二・漆畑敏の両氏に、様々な点でお世話になった。ここに、あらためて感謝の意を記させていただきます。

9 関係文献

伊藤秋男・木村光一「愛知沓掛城跡」(『木簡研究』七号 一九八五年)
豊明市教育委員会『沓掛城址』(一九八六年・印刷中)

(木村光一)

